

2018年

11月10日
第320号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木644番地1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

分岐点に立つ

園長 児嶋 草次郎

のどかな晩秋を迎えています。台風で随分庭や畑も痛めつけられたけど、花壇の花々も精一杯花を開いて秋を謳歌し、畑のホウレン草、キャベツ、白菜は一部蒔き直したり植え直してその後順調に成育し、収穫感謝祭に向けて万全の構えです。自然は何があっても時を止めることなく着実に前に進んでいきます。

さて、10月を振りかえると重要な出来事がいくつかありましたので、今回はそのことについて書かせていただきます。

1、まず石井記念友愛社同窓会の設立です。長年あたためてきた構想でしたが、今回急ぎょ実現しました。今後、中身を詰めていきます。

昨年12月でしたか、名古屋で働いている卒園生のヒロノブ君（50歳）が宮崎に帰って来て、現在友愛園の指導員をしている杉田竹見君の声かけで、高鍋で旧職員や同じ年頃の卒園生何人かとヒロノブ君を囲む会を行い、その時盛り上がり過ぎて名古屋でも同窓会をしようという話しになったのです。

10月13日（土）、宮崎からは、私以外に、石井記念有隣園の宮城園長（元友愛園指導員）、杉田竹見君（友愛園指導員）、杉田松男君（神武の家調理師）が出席して、愛知県知多市内の割烹「川上」で同窓会は行われました。名古屋地方の出席者は、空港まで車で迎えに来てくれたタカシ君、それからヒロノブ君、クニトシ君、クニトシ君の妻となっているかおりさん、クニトシ君の成人した息子さん、ミツノブ君、長野からもノリオ君、そして「川上」の店主マコト君の8人です。

マコト君手作りのコース料理に舌鼓を打ちながら、薪でフロを湧かしたり御飯を炊いたりしていた頃の昔の思い出話に興じ、楽しく交流しました。学校の同窓会と違って、ほんとうに寝食を共にした仲間でしたので、どれだけ時間がたとうとも親戚・兄弟のように懐かしく会話がはずみます。

私は、この会の始まる前の挨拶の中で、同窓会設立を提案しました。同時に同窓会加入の条件も3点ほどあげさせていただきました。

① 石井記念友愛社後援会「石井十次の会」に加入した者であること。

② 会員に2人以上の推薦を得た者であること。

③ 卒園後、5年を経過し、成人している者であること。

なぜこんなに厳しい条件をつけるのか。それは一つは、これから世に出る新しい卒園生たちを支える同窓会になってほしいという強い願いがあります。2年ほど前でしたが、高卒生2人が名古屋方面に就職して、半年、1年しか続きませんでした。ある程度社会的に安定した生活をしている大先輩方が支援してくだされれば、違った流れができていくことでしょう。それからもう一つは、卒園生たち互いのプライバシーをしっかりと守れるような会でなければならないということです。残念なことです。卒園生皆んなが常識的に生きているわけではありません。苦労して築きあげた家庭を、脅かすような人間関係になってはいけません。

この同窓会設立については、皆賛同してくれました。本部ができる前に名古屋支部ができた形となりましたが、初代会長に竹見君を指名しましたので、近いうちに宮崎本部も立ち上がることでしょう。できれば、岡山支部も早い時期に作れないものかと思っています。岡山には現在4名が大学で学んでおり、この学生たちを支える組織がないのです。岡山でこの友愛通信を読んでおられる卒園生の方がおられたら、御協力ください。

実は、この同窓会設立を今回提案しようという思いは、宮崎空港を立つまではありませんでした。名古屋方面にはめったに行けるわけではありません。この際、明治24年濃尾震災の時に石井十次が一時期設置した震災孤児院の跡地に立ってみたいという思いがありました。竹見君に話したら、タカシ君に連絡を取ってくれ、その跡地と思われる場所をタカシ君が捜してくれていたのです。名古屋市白壁町です。実際その地に立った時、頭の中で発酵していた思いが突然湧き上がって来て、同窓会の件は提案を決意したのです。遠い先人たちからの啓示なのかもしれません。

2、次の重要な出来事とは、北海道札幌で開催された全国児童養護施設長研究協議会に出席し、意見発表したということ（10月17日～19日）。このことは、予告として先月の友愛通信にも書きました。重要と言える部分は、この大会に、現在九州保健福祉大4年生のアキヒコ君とアサミさんを一緒につれて行ったということです。私の意見発表の中で、2人に当事者としてそれぞれ5分程度思いを述べてもらったのです。おそらく、今までの大会でこのような例はなかったのではないのでしょうか。二人は緊張はしていたようですが、堂々と発表しました。一部分だけ紹介します。

九州保健福祉大学4年 アキヒコ

「私は生後間もなく乳児院に預けられ、2歳から18歳までの16年間を、石井記念友愛園で育てていただきました。愛情を持って私たちを育ててくれた先生方と

の出会いのおかげで、今私はこうして大きな志を抱いて夢に向かって頑張れているところです。

新ビジョンでは、施設では、愛着関係形成が難しいとか、永続的支援が保障できないとか言われています。それは当事者である私が否定します。大切なことは、子供たちがどんな環境の中でも立派な大人になれるように支援することです。生活習慣を確立させ、夢を持たせてあげることが本当に必要なことだと思います。」

九州保険福祉大学 4年 アサミ

「私は5歳から13年間、児童養護施設で生活し、九州保健福祉大学に通っています。

新ビジョンが発表されました。様々な考えがあると思います。里親制度自体は良いものだと思いますが、児童養護施設にも里親にはない強みがあるため、そこをもっと活用すると良いのではないかと思います。

私は児童養護施設で生活したことを、一切後悔していません。むしろ幸運だと思い、感謝しています。」

私の意見発表を含めて反応はいかがだったのでしょうか。これは私の感触ですが、同じ児童養護施設でも、全国的に見れば、もう随分価値観が違って来ているのではないかと感じます。共鳴している人はそう多くないとも感じました。今さら通勤交代制を住み込みには変えられないという本音もあるでしょう。後のグループ討議の中で次のような話も聞き、文化の違いを強く感じました。まとまったお金を園児に持たせ自由に旅行させるといいます。電車等を乗り間違えたとしても、見守るだけ。その体験を通して社会性を身につけさせるとか。自立する前にアパートのような部屋で1か月2か月一人で自由に生活させ、失敗も含めて自立訓練させるというのも同じような発想でしょう。そこには、教育的発想はなく、やはり支援するという次元です。そもそも賢明な親が我が子にそのように無駄遣いをさせるのでしょうか。施設消滅への道へ進むのか、それとも新たな機能を構築していく道を確保できるのか、まさにその分岐点に立たされているのだと感じます。ソーシャルアクションを含めて、新たに開拓者の気概で進まねばならないと感じます。

3、10月20日（土）から21日（日）は、中学生以上の子供たちとの鹿児島への「郷中旅行」でした。西郷隆盛のお墓にお参りし、隣接する「西郷南洲顕彰館」で、薩摩藩の伝統的教育制度「郷中教育」について学ぶための一泊旅行です。中・高生は3年に一度は訪れるようにしています。特にリーダーたちの自覚を養成するにおいて、有効な研修となります。西郷さんもこの「郷中旅行」の中で学んだのですが、大人たちの世界とは違った所で、青少年どうしが切磋琢磨し合い、率先垂範の精神、弱者へのいたわり等を学んだのです。

旅行から帰って来て、上級生たちは次のように感想を書いています。

「青少年が中心となり、先輩が後輩を指導し、自主的に心身を錬成する組織である。私はこの組織は友愛園と言う先輩と後輩の関係と同じだと思う。上級生は下級生を指導し、手本をみせなければならない。しかし、自分の生活を振り返って見ると、高校生なのに、遅刻したりすることが多く、あまり手本をみせられていない。口で注意することは簡単だが、実際に行動して示さないと下級生はついて来てくれないと思う。まずは自分の生活を見直して下級生に模範を示せるように努力することが大切だと感じた。」

みもも 高2

『郷中教育』についても多くを学びました。副館長になったので、下級生をしっかり指導し、また、見本となり、三友館を引っ張っていけるような存在になっていきたいです。

クロショウ 中3

先ほども書きましたように「郷中旅行」は3年に一度は実施して来ていますが、今回の旅行で重要なことは、初めて西郷の吉野村開墾地を訪ね、その石碑（南洲翁開墾地遺跡碑）の前に立ったことです。明治6年、朝鮮問題で大久保利通等と対立した西郷は鹿児島に帰り、吉野村開墾社を設立（明治8年）。一農民にかえって若者たちとともに開墾事業によって国を興し、また夜は共に学ぶことで人材育成することを新たに志したのです。

私は、今までそのことについてはあまり重要視してこなかったのですが、石井十次の少年時代の話を資料館を訪れる方々に話しているうちに放っておけなくなったのです。鹿児島の警察署に51日間留置され（15歳）、そこで元私学校生から西郷の話を聞き感化され、出所後、開墾事業を試みています。もしかして、石井自身、吉野村の開墾地に立ったことがあるのではないかと思えて来たのです。話を聞いたくらいで、重労働である開墾を真似するような者はそういないでしょうし、その後、岡山孤児院をやり始めた頃からこの茶臼原の土地を確保し始めたというのは、開墾の再挑戦とも取れます。それだけ西郷の開墾事業は石井にとってインパクトのあるものであったわけです。実際にその地に行ってみて初めて強い共感は湧き上がるものでしょう。現在の友愛園の労作教育の原点とも言えます。

古い記念碑の立つその地は、鹿児島市内から8Kから10K山に入ったところにありました。あたりはうっそうとした林になっていましたが、この茶臼原も高鍋から8Kくらいで、イメージは重なりました。旅の途中で得た「西郷どんとよばれた男」（原口泉著）には、「開墾社は三十九ヘクタールの広さがあり、西郷は農民の一人として、若者とともに鋤を振るい、夜はともに学び、未来を築いていこうとしたのでしょ。う。」と書いてありました。

4、10月30日には、宮崎市内にお住いの香月保基（やすもと）様より、100万円

の御寄付をいただきました。息子さんの克公（よしただ）様は、綾町内でワイナリーを作られ2年目、その工場内でタンクをバックに拝受致しました。4年前にも同額の御寄付をいただいています。あの時が初めての出会い。おとなしそうな息子さんで、10年15年かけて自分の志を形にする野望の持ち主には見えませんでした。今回お会いした克公様は、顔中ヒゲを生やした精悍な事業家になっておられ、「そのうちベンツに乗られるんでしょうね」と、私は冗談を言いました。

お金は、石井記念友愛社後援会「石井十次の会」の橋田会長と相談の上、今年度作っていただいた給付型奨学制度の基金にさせていただくことにしました。来年度から月2万は出していただきたい。

もう一つ、10月29日、大阪のある弁護士事務所より、石井みな子様（仮名）の遺産を石井記念友愛社に相続（寄付）させる手続きにはいると連絡がありました。夏頃から何度か電話等あったのですが、みな様は、石井記念友愛社の古い卒園生で、自分が亡くなった後、遺産は世話になった友愛社にすべて寄付したいと弁護士に相談されたそうです。みな様が在籍したことがあることを確認し、弁護士には受ける旨を伝えました。まとまった金額であるならば、今後構想のある母子支援のグループホームや主に大学生たちのための自立援助ホーム設立の資金にさせていただくつもりです。みな様は10月23日に亡くなられたとのこと。御冥福をお祈りいたします。

今日は11月5日（月）、午前中保育園と、友愛園の職員計12名と一緒に、石井十次墓地周辺の草刈をしました（十次研修）。10月27日が一周忌だった桂はるなさんの墓前にはたくさんの花がたむけられていました。草刈も終える頃、白く可憐で清楚な花を発見。郷中旅行で泊ったホテルの庭に咲いていた花と一緒にです。友愛園の庭にも咲いてほしいと思い鹿児島からわざわざ種を採取して持って帰ったのですが、こんな所にも咲いているとは感動です。私は密かに、この花を「はるな草」と呼ぶことにします。